

[B年] 待降節第1主日(2021年11月28日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書51章4～11節**

- 4 わたしの民よ、心してわたしに聞け。
わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。
教えはわたしのもとから出る。
わたしは瞬く間に
わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。
- 5 わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ
わたしの腕は諸国の民を裁く。
島々はわたしに望みを置き
わたしの腕を待ち望む。
- 6 天に向かって目を上げ
下に広がる地を見渡せ。
天が煙のように消え、地が衣のように朽ち
地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても
わたしの救いはどこしえに続き
わたしの恵みの業が絶えることはない。
- 7 わたしに聞け
正しさを知り、わたしの教えを心におく民よ。
人に嘲られることを恐れるな。
ののしられてもおののくな。
- 8 彼らはしみに食われる衣
虫に食い尽くされる羊毛にすぎない。
わたしの恵みの業はどこしえに続き
わたしの救いは代々に永らえる。
- 9 奮い立て、奮い立て
力をまとえ、主の御腕よ。
奮い立て、代々どこしえに
遠い昔の日々のように。
ラハブを切り裂き、竜を貫いたのは
あなたではなかったか。
- 10 海を、大いなる淵の水を、干上がらせ
深い海の底に道を開いて
贖われた人々を通らせたのは
あなたではなかったか。
- 11 主に贖われた人々は帰って来て
喜びの歌をうたいながらシオンに入る。
頭にとこしえの喜びをいただき
喜びと楽しみを得
嘆きと悲しみは消え去る。

【使徒書日課】**テサロニケの信徒への手紙一5章1～11節**

1兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。2盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。3人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破壊が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。4しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるわけではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。5あなたがたはすべて光の子、昼の子だから

です。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。6従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。7眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。8しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。9神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。10主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きようになるためです。11ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

【福音書日課】 マルコによる福音書13章21～37節

- 21そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。
- 22偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。23だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。
- 24「それらの日には、このような苦難の後、
太陽は暗くなり、
月は光を放たず、
星は空から落ち、
天体は揺り動かされる。
- 26そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。27そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」
- 28「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。29それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。30はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。31天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

32「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。33気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。34それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。35だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。36主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。37あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書51章4～11節

- 4 私の民よ、心して聞け。
私の国民よ、私に耳を傾けよ。
教えは私から出て
私は私の公正をもちもろの民の光とする。
- 5 私の正義は近く、私の救いは現れた。
私の腕はもちもろの民を裁く。
島々は私を待ち望み
私の腕に期待する。
- 6 目を天に上げよ。
また、下の地を見よ。
天が煙のように散りうせ、
地が衣のように擦り切れ
そこに住む者たちは、ぶよのように死ぬ。
しかし、私の救いはとこしえに続き
私の正義は挫けることはない。
- 7 聞け、義を知る者
私の教えを心に持つ民よ。
人のそしりを恐れるな。
彼らの罵りにおののくな。
- 8 まことに、彼らは衣のように虫に食い尽くされ
羊毛のように幼虫に食い尽くされる。
私の救いは代々に続く。
- 9 目覚めよ、目覚めよ。
力をまとえ、主の腕よ。
目覚めよ、かつての日々のように
いにしえの時代のように。
ラハブを切り裂き、竜を刺し殺したのは
あなたではなかったか。
- 10 海を、大いなる深淵の水を干上がらせ
海の底を道とし
贖われた人々を通らせたのは
あなたではなかったか。
- 11 主に贖い出された人々が帰って来る。
歓声を上げながらシオンに入る。
その頭上にとこしえの喜びを戴きつつ。
喜びと楽しみが彼らに追いつき
悲しみと呻きは逃げ去る。

テサロニケの信徒への手紙一5章1～11節

1きょうだいたち、その時と時期がいつなのかは、あなたがたに書く必要はありません。2主の日は、盗人が夜来るように来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。3人々が「平和だ。安全だ」と言っているときに、ちょうど妊婦に産みの苦しみが訪れるように、突如として滅びが襲って来るのです。決して逃れることはできません。4しかし、きょうだいたち、あなたがたは闇の中にいるわけではありません。ですから、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。5あなたがたは皆、光の子、昼の子だからです。私た

ちは、夜にも闇にも属していません。6ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んで(別訳→しらふで)しましょう。7眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔います。8しかし、私たちは昼に属していますから、信仰と愛の胸当てを着け、救いの希望の兜をかぶり、身を慎んでいきましょう。9なぜなら、神は、私たちを怒りに遣わせるように定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストによって救いを得るよう定められたからです。10主は、私たちのために死んでくださいました。それは、私たちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるためです。11ですから、あなたがたは、今そうしているように、互いに励まし合い、互いを造り上げるようにしなさい。

マルコによる福音書13章21～37節

- 21その時、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。
- 22偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人々を惑わそうとするからである。23だから、気をつけていなさい。一切のことを、前もって言うておく。」
- 24「それらの日には、このような苦難の後
太陽は暗くなり
月は光を放たず
25星は空から落ち
天の諸力(別訳→万象)は揺り動かされる。
- 26その時、人の子が大いなる光と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。27その時、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者を四方から呼び集める。」
- 28「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が出て来ると、夏の近いことが分かる。29それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。30よく言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない(直訳→過ぎ去らない)。31天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。32その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

33「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたは知らないからである。34それはちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに責任を与えてそれぞれに仕事を託し、門番には目を覚ましているようにと、言いつけるようなものである。35だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴く頃か、明け方か、あなたがたには分からないからである。36主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。37あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・11月28日「待降節第1主日」の日課主題は「主の来臨の希望」。「待降節」は、西方教会の教会暦年の初めに置かれた期節で、「降誕日」(12月25日)の前4主日遡って始まるように設定されてきた(単純に11月30日に最も近い主日から始まる、と説明される)。なお、教会暦上、厳密には古来の(ユダヤ教以来の)習慣から、設定された開始日の前夜(日没後)から始まり、最終日の日没で終わるものとされている。そこで、「降誕日」の祝祭も前夜12月24日の日没後から開始され、英語圏ではその時間帯を意味する「イブ(→イブニング)」が付された呼称「クリスマスイブ」が用いられる。伝統的な教会では、現在でも同様の習慣が、「復活祭」や通常の「主日」にも適用されている。

・「待降節(アドヴェント)」は、二つの視座で「キリストの来臨」に備える期節として位置づけられている。第一には二千年前にベツレヘムで誕生された御子イエスの「降誕」を想起し記念するための備え、第二には「再臨」のキリストを迎えるための備えである。この二重の視点は神学的意義において重ねて理解されるもので、「再臨」は「セカンド・アドヴェント」とも称される。

・この日の旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、捕囚の民がシオン(エルサレム)に帰還する日を迎えることを告げる「第二イザヤ」の預言の箇所。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙一」から、「主の日」の来臨に備えるべきことを教える箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、主イエスの「小黙示録」の後半部に相当する箇所。

旧約日課(イザヤ 51 章より)

・「イザヤ書」は、ヘブライ語正典「後の預言者」の第一に置かれた預言書で、正典「預言者」全体を一つに結び付ける文書として機能している。一般に、39章までが「第一イザヤ」と呼ばれ、前8世紀末の歴史的預言者イザヤの「預言の書」に基づくとみられる内容、40章以下が「第二イザヤ」と呼ばれ、前6世紀バビロン捕囚から解放・帰還の時代を背景としたイザヤの伝統継承者らによる預言集として構成されている、と理解される。

・日課箇所は、「第二イザヤ」中に相当し、すでに歴史的バビロン捕囚がペルシア帝国キュロス王の登場によって解かれ(キュロスに関する言及は44~45章)、捕囚民の帰還事業が始まったことを踏まえた内容となっている。

・10節「贖われた人々」は「ゲウリーム(←ガアル)」、11節「贖われた人々」は「ペドゥリーム(←パダ)」と、異なる語の訳語。前者(ガアル)の語義は「取り戻す」、後者(パダー)の語義は「買い戻す」と多少異なるが、用語の使い分けは不明瞭。ただし、「イザヤ書」では、「第二イザヤ」に集中して前者(ガアル)が繰り返し用いられているの対して、後者(パダ)の用例は少ない。

使徒書日課(Ⅰテサロニケ 5 章より)

・「テサロニケの信徒への手紙一」は、使徒パウロがバルナバ宣教団から独立して宣教活動を始めた最初に着手したマケドニア伝道の中で創設されたと考えられる「テサロニケ」の教会に宛てた書簡で、「パウロ書簡集」中ではもとより「新約」文書中でも最も早い段階で著された文書とみなされている。パウロは、この書簡をテサロニケ教会創設後のアテネ・コリント伝道中に著したとも言われるが、詳細は不明。「テサロニケ(テッサロニキ)」は、現在のギリシア北部の商業都市で、前4世紀末、アレクサンドロス大王没後にマケドニア王となったカサンドロスによって建設され、以来、重要な大都市として栄え、現在もギリシアではアテネに次ぐ第二の都市と位置づけられている。

・日課箇所が冒頭で取り上げる「その時と時期」とは、前段4章で取り上げられている「主の再臨」の時期のこと。弟子たちの教会の初期において、「キリストの再臨」は主要な関心事で、「再臨」と共に始まる「終末」に「信じる者たち」は「再臨のキリスト」に迎えられて天上に引き上げられるという「携挙」が自分たちの生存中に起こるのかどうかということが問題となっていた。殊に、「死なずに携挙される」という考えが流布する中で、「信仰者として死んだ者は携挙されるのか」という疑問が、一部の信仰者の間で信仰を揺るがせる問題となっていたと推察される。パウロは、本書簡では、これらの「携挙」のイメージを初代教会の人々と共有しながらも、不安を払拭することを意図した教えに徹しており、徒に「終末」や「再臨」の信仰を煽ることはしていない。パウロは、後期の書簡では、このような「携挙」観を伴う「終末」論や「再臨」論を取り上げることに慎重になり、むしろ、「終末」信仰や「再臨」信仰を現在の信仰者としての生活を方向づけるためのものとして位置づけ、説くようになっていくが、日課箇所の結論部分はすでにそのような方向性に向かっている。

福音書日課(マルコ 13 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の一部として伝えられる主イエスの「小黙示録」の後半部分に相当し、共観福音書が並行して伝えている。「小黙示録」の概要と前半部分に関しては、二週前の資料「聖書と祈りの会 211110」を参照。

・日課箇所は、エルサレム神殿の破壊という歴史的出来事(紀元66-70年ユダヤ戦争の結果)を示唆する記述(14節)から始まる一連の叙述の中に置かれている。そもそも「小黙示録」自体が、主イエスの時代には堅固にそびえていた神殿の崩壊を予示することから始められた教えであるが、この箇所の共観福音書の記述の相違が大きいことは、各福音書の執筆時期推測の手掛かりとされてきた。とは言え、エルサレムが敵国軍隊に包囲され、最終的に陥落、神殿に至るまで蹂躪・破壊されるという出来事は、ユダヤ人の歴史においてすでに繰り返されていたことであり、これらの

記述が聖書正典内外の伝える過去の出来事を参照して描写されているとも考えられる。

- ・22 節「偽メシア(プセウドクリストス)」および「偽預言者(プセウドプロフェテス)」は、それぞれ「キリストを装う者」「預言者を装う者」という語義で、「自称メシア」「自称預言者」という程度の意味。
- ・23 節「気をつけていなさい」、33 節「気をつけて」は、「注目する」という語義の「ブレポー」。

来週の誕生日 (11月28日～12月4日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-230 番「起きよと呼ぶ声」(= I 174「起きよ、夜は明けぬ」)は、16 世紀後半ドイツの神学者ニコライの作詞作曲。「コラルの王」と称される讚美歌。この讚美歌に基づいて、バッハ(カンタータ 140 番)らが作曲している。
- ・21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」は、20 世紀オーストリアの女性教師フェルシュルの作詞。さまざまな曲で歌われてきたが、ドイツのカトリック音楽教師ロールの旋律でよく知られるようになった。
- ・21-472 番「朝ごとに主は」は、20 世紀前半のドイツの宗教詩人ヨッヘン・クレッパの宗教詩集『キリエ』(1938 年)所収の「朝の歌」にツェベライが曲を付けた讚美歌。クレッパの詩はイザヤ 50:4 に着想を得ている。
- ・21-235 番「久しく待ちにし」は、18 世紀英国教会史司祭でメソジスト運動の創始者となったジョン・ウェスレーの弟チャールズ・ウェスレーの作詞で、英語圏では最も広く歌われているアドヴェント讚美歌の一つ。この歌詞に組み合わされた曲は複数あるが、収録曲は、19 世紀英国の教会音楽家ゴントレットの作曲したもの。

21-230 『起きよ』と呼ぶ声

Wachet auf, ruft uns die Stimme

1. Wachet auf / ruft uns die Stimme / Der Wächter sehr hoch auff der Zinnen, / Wach auff du Statt Jerusalem. / Mitternacht heißt diese Stunde / Sie ruffen uns mit hellem Munde: / Wo seydt ihr klugen Jungfrauen? / Wohlauff / der Bräutigam kompt / Steht auff / die Lampen nimpt / Halleluia! / Macht euch bereit / Zu der Hochzeit / Ihr müsset ihm entgegengeh.
2. Zion hört die Wächter singen / Das Herz thut ihr vor Frewden springen, / Sie wachet und steht eilend auff: / Ihr Freund kompt vom Himmel prächtig, / Von Gnaden starck, von Wahrheit mächtig: / Ihr Liecht wirdt hell, ihr Stern geht auff. / Nu komm du werthe Kron / Herr Jesu, Gottes Sohn / Hosianna. / Wir folgen all zum Frewden Saal / Und halten mit das Abendmal.
3. Gloria sey dir gesungen / Mit Menschen und Englishen Zungen / Mit Harpfen und mit Cymbaln schön: / Von zwölf Perlen sind die Pforten / An deiner Stattt / wir sind Consorten / Der Engeln hoch umb deinen Thron / Kein Aug hat je gespürt / Kein Ohr hat mehr gehört / Solche Frewde. / Deß sind wir fro / jo / jo / Ewig in dulci iubilo.

21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」

Wir sagen euch an den lieben Advent

1. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die erste Kerze brennt! / Wir sagen euch an eine heilige Zeit, / Machet dem Herrn den Weg bereit!
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
2. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die zweite Kerze brennt! / So nehmet euch eins um das andere an, / Wie euch der Herr an uns getan.
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
3. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die dritte Kerze brennt! / Nun trag eurer Güte hellen Schein / Weit in die dunkle Welt hinein.
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
4. Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die vierte Kerze brennt. / Gott selber wird kommen. Er zögert nicht. / Auf, auf ihr Herzen und werdet licht!
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|

21-472 「朝ごとに主は」

Er weckt mich alle Morgen

1. Er weckt mich alle Morgen, / Er weckt mir selbst das Ohr. / Gott hält sich nicht verborgen, / führt mir den Tag empor, / daß ich mit Seinem Worte / begrüß das neue Licht. / Schon an der Dämmrung Pforte / ist Er mir nah und spricht.
2. Er spricht wie an dem Tage, / da Er die Welt erschuf. / Da schweigen Angst und Klage; / nichts gilt mehr als Sein Ruf. / Das Wort der ewgen Treue, / die Gott uns Menschen schwört, / erfahre ich aufs neue / so, wie ein Jünger hört.
3. Er will, daß ich mich füge. / Ich gehe nicht zurück. / Hab nur in Ihm Genüge, / in Seinem Wort mein Glück. / Ich werde nicht zuschanden, / wenn ich nur Ihn vernehme. / Gott löst mich aus den Banden. / Gott macht mich Ihm genehm.
4. Er ist mir täglich nahe / und spricht mich selbst gerecht. / Was ich von Ihm empfahe, / gibt sonst kein Herr dem Knecht. / Wie wohl hat's hier der Sklave, / der Herr hält sich bereit, / daß Er ihn aus dem Schläfe / zu seinem Dienst geleit.
5. Er will mich früh umhüllen / mit Seinem Wort und Licht, verheißen und erfüllen, / damit mir nichts gebricht; / will vollen Lohn mir zahlen, / fragt nicht, ob ich versag. / Sein Wort will helle strahlen, / wie dunkel auch der Tag.

21-235 「久しく待ちにし」

Come, Thou Long-expected Jesus

1. Come, thou long-expected Jesus, / born to set thy people free; / from our fears and sins release us; / let us find our rest in thee.
2. Israel's strength and consolation, / hope of all the earth thou art; / dear desire of every nation, / joy of every longing heart.
3. Born thy people to deliver, / born a child and yet a king, born to reign in us forever, / now thy gracious kingdom bring.
4. By thine own eternal Spirit / rule in all our hearts alone; / by thine all-sufficient merit / raise us to thy glorious throne.